

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

NO. 16

目 次

舞いと踊り	学習院大学名誉教授	諏訪 春雄	2
自然人アイヌ こころの歌と踊り	アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎	4
「異文化との遭遇—日本民俗舞踊アンサンブル中近東公演—」 日本舞踊家・振付家	林 千枝	7	
中国民族舞踊と稲作文化（9） 三 稲作文化の中の民俗舞踊 6. ハニ族のミャオアイナとザルト	前雲南省舞蹈家協会常務副主席	劉 金吾	9
平成 19 年度黨民族舞踊文化財団活動予定			11

舞いと踊り

学習院大学名誉教授

諏訪 春雄

舞踊は近代以降の用語

現在は一般に普及している舞踊ということばは江戸時代にはなく、明治になって、ダンスということばの翻訳語として誕生した。

明治十一年（一八七九）の十月から翌年の四月にかけて刊行され、当時としては画期的なベストセラーとなった政治小説『花柳新話』（ロード・リットン作、織田純一郎訳）にあらわれたのが舞踊の使用例の早いものである。さらに、このことばを述語として定着させるうえで、大きな役割を果たしたのが明治三十七年（一九〇四）に刊行された坪内逍遙の『新楽劇論』であった。この書物のなかで、逍遙は舞踊をそれまでの舞いや踊りに換えて使用しただけではなく、その内容を舞、踊り、振りという三つの要素に分析し、のちの舞踊論の発展の基礎をつくった。

舞いは中世以前、踊りは近世

以降に脚光を浴びる

舞いの用例は、「人長舞」、「久米舞」、「五節舞」、「国栖舞」、「隼人舞」、「幸若舞」、「曲舞」、など中世以前、例外をふくみながらも、京坂に集中し、踊りは、「念仏踊り」、「風流踊り」、「踊り念仏」、「鹿島踊り」、「伊勢踊り」、「盆踊り」など、近世以降、これも例外をふくみながらも、江戸と地方に多くの用例をみることができる。

これらの、用例の内容を分析し、両者の特色をまとめると次のようになる。

舞 い

古代から中世に成立 「まわる」の意味から
旋回運動中心 滑るように足を使い角をとる
意識的に制御された所作 貴族的 静的 京阪中心



讃岐 念仏踊り

踊 り

近世以降 跳躍運動 両足を大地（舞台）から離す 熱狂的・庶民的 動的 江戸・地方中心

中国最古の漢字辞書『説文解字』は「舞」を「楽也」と説明し、「踊」は「跳也」と説明している。つまり、舞いは音楽の旋律に乗った身体の動きであり、踊りは跳躍中心の動きであった。

舞いは神迎え、踊りは神降臨

両者ともにシャーマニズムの憑依型（ポゼッション型）に由来する。憑依型は、神迎え・神降臨（人神交流）・神送りの三部構成をとり、神迎えは、五方の神への祈り（角をとる・旋回）、正調の貴族的音楽、制御された動き、静的などの特色を示し、神降臨は、動的、熱狂的、跳躍、庶民的音楽などの特色を持つ。この神迎えが舞いを生み、神降臨が踊りにつながった。

日本の舞踊史が大きく舞いから踊りへ推移したのは、古代に大陸から伝来した舞楽と中世流行の念仏踊りの影響が大きかった。



韓国 巫女

＝自然人 アイヌ＝

こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者

四宅 豊次郎

第 14 回

丹葉節郎先生はエネルギッシュな文化・社会活動で、釧路地方はおろか北海道の広範囲な地域にわたって、その名を知られている人物である。

各界に顔のきく丹葉先生は阿寒湖アイヌ協会の相談役でもあったので、われわれ協会役員は先生を伴って、まず最初に阿寒バス本社へと出向いた。

阿寒バス本社では社長自ら対応してくれ、「まりも祭り」の歴史と現状をつぶさに説明すると、熱心に話を聴いていた社長は即座に「よく分かりました。当社としても道東観光発展のため協力させていただきます。つきましては私共の路線を利用する参加者の皆様には、往復のチケットを無料で発行いたしましょう。」と快く承諾してくれた。

阿寒バスは、釧路、白糠からと、弟子屈方面からの参加者を優待乗車させてくれることになった。

阿寒バスが了承してくれたこともあって、帯広地方から来る十勝バスも、美幌から来る北見バスも右へならえで快諾してくれた。

この三社のバス会社による優待券の利用は、その数年後に到来するマイカー時代までお世話になり、その間に参加者が年々増えてきたことは言うまでもない。

このようにして、まりも祭りが半世紀にもわたって一回も途切れることなくつづけられてきたのには、後援してくれた個人や団体、それに企業ががあったからこそできたので、私達はその陰の力添えを忘れてはならない。

——まりも祭りの変遷——

長い年月つづけられてきた「まりも祭り」にも紆余曲折はあった。

祭りの日数を二日に決めたり三日にしたこともあったが、ある年代になって毎年十月九日（まりもを迎える儀式）と、十日の（まりもを送る儀式）に決定した。

まりも祭りを三日間にするという発案は、ある地元の有力者が「近年広く全国的に『まりも祭り』が知られて年々観光客が増加している。その客を一日でも長く阿寒湖畔に引き留めるために、一日多く行事を加えたらどうか」という考えであった。

阿寒観光をより推進させるためには、地元の業者や住民は誰もが賛同した。

結果は、まりも祭りを10月8日《まりもを迎える



まりも祭りのひととき（昭和35年頃）
（左から）日下昭吾、秋辺今吉、舌辛音作
弟子豊治、秋辺三次郎の各氏



第40回・まりも祭り記念写真（昭和64年・平成元年）

地見学などのアトラクションを行っている。9日の《まりもを迎える儀式》は、阿寒湖の棲息地に静かに眠っている国指定の特別天然記念物のマリモを、関係機関の許可を受け十個程掬い揚げ、アイヌの若者三名が夕闇せまる頃に丸木舟で湖岸園まで運んでくる。湖岸では正装したウタリ（同胞）三百名以上が出迎えて、メノコ達は一年ぶりに迎えるマリモに対して歌をうたい、男達は関（とき）の声をあげて歓迎する。

丸木舟が岸辺に着くと、マリモは若者から長老の手に厳かに渡される。

そして、参加しているアイヌ男女はそれぞれの手に松明（たいまつ）を持ち、また見物している観光客にも渡されて、その数五百本以上にもおよぶ松明行進に護られてアイヌコタンへ向かうのである。

コタンに到着すると、広場には大きな篝火（かがりび）が燃えあがっている。

この広場では、各地方から参加してきたウタリや、地元のアイヌがそれぞれ郷土自慢の舞踊の競演をくりひろげる。

篝火を囲んで舞う奉納舞踊は幻想的な雰囲気につつまれ、歌い手の声もおのずと高くなり手拍子にも力がはいる。

幾重にも輪になり見物している観光客からも感嘆の声があちこちから上がる。

夜九時を過ぎてようやく広場の舞踊が一段落した。今夜の行事はこれで終了したので、全員で宿泊所へと向う。

遅い会食をとりながら、そこで懇親会が開かれるのである。

各地方からの参加者については、さまざまな思い出がある。

その中で、今も脳裏に鮮明な印象として残っている場面をひとつ紹介したい。

——真剣に根性をかけて踊れ——

日高地方の太平洋沿岸の街から参加したグループであった。

まりも祭りでは、行事の会場や懇親会の席で、自分達の故郷に伝わるアイヌ歌謡や舞踊をいくつか披露しなければならない。

この地の人々は、いろいろな事情もあって、これまで数十年もの間、公式の面前でアイヌの行事をおこなったり、民族舞踊を歌い舞う機会がなかった。

そのような年代、阿寒湖アイヌ協会から「まりも祭り」に参加よびかけの案内状が届いた。村

人は長老を中心に相談の結果、参加することに決めた。

これまで他の土地では発表したことの無い、郷里の芸能を歌ったり踊ることは喜びであり誇りでもある。

フチ（唄）をはじめ十数人の女性が集い、それぞれの仕事の合間をみて、一ヶ月かけて特訓を重ねた。努力のかいあってどうにか人前で踊れるように仕上がった。

10月9日、午後9時以後に開催された懇親会は大いに盛り上がり、各地の舞踊が次々に披露されてゆく。

いよいよ初参加した日高グループの出場する順番がきた。

指導者でありもう八十歳を過ぎていると思われる老婆が、中年の女性に手を引かれてヨボヨボした足取りで舞台にあがると、その後に続いて十数名の踊り手が登場した。

私はこの懇親会の司会と進行係をつとめていたので、気を付けながら一部始終を見守っていた。

老婆は椅子に腰かけると歌い始めた。年の割には張りのあるよく通るいい声である。輪唱するので三名の歌い手が後につづく。

その声に合わせて踊り手は輪をつくって一生懸命に舞いはじめた。

しばらく踊りはつづいていたが、その内に老婆が何かブツブツ言っている。そして次には立ち上がったかと思うと、ツカツカと踊り手の輪に近づき、一人の女性の腰元を蹴ったのである。

私は驚いた。先刻までヨボヨボしていた老婆が、急にスクッと立っての素早い動きだったから。

「どうして、そんな下手な踊りをしているんだ！もっと足腰を曲げて！順序もアベコベでないか！」

昔気質の老婆は、自分が教えたとおりに踊っていないので、見るに見かねて思わず喝（かつ）を入れたようだ。

囲りの者があわてて老婆を両脇から抱えて、元の椅子に座らせた。

その様子を熱心に観ていた人々は、＝やはり昔の人は違うなあー、アイヌ舞踊ひとつにしても真剣に根性をかけている・・・＝と感動したものである。



たいまつの明かりの中で、幻想的な雰囲気「まりもを迎える儀式」

平成11年10月10日

「異文化との遭遇—日本民俗舞踊アンサンブル中近東公演—」

日本舞踊家・振付家

林 千枝

私たち日本民俗舞踊アンサンブルが最初の公演地、クウェートに向けて旅立ったのは、1990年1月、イラクがクウェートに侵攻するわずか数カ月前のことである。クウェート、トルコ、アラブ首長国連邦、エジプトと4ヶ国5ヶ所、一ヶ月を超える旅である。一行は演出の福田一平団長を始め、舞踊家11名、演奏家7名とスタッフで総勢24名。演目は祭の獅子で幕を開け、綾子舞、鬼剣舞、備中神楽「大蛇退治」というプログラムである。

私自身それまでも何回か海外公演の経験はあったが、なにしろ訪問先がアラブの国々とあって、公演に対する反応、食事や買物など現地での生活、どれひとつをとっても予想のつかないものになるだろうと思われた。

出発前に、この公演の派遣元、国際交流基金の担当者から、現地の説明を受ける機会があった。

今回の訪問国は全てイスラム教国家である事、それに伴う食習慣の違い、例えば豚肉など食べてはいけないものがいろいろあること、お酒は飲んではいけないこと（トルコだけは例外）、女性は肌を露出した服装をしてはいけないなど、確かにガイドブックにも書いてあるそういった彼らの習慣を旅行者である私たちも厳格に守らなくてはならない。欧米先進国とは大きく状況が異なるので、生活必需品も現地で買えない可能性を考え、全て持参してください、とも言われた。

各訪問先では現地の日本大使館や領事館が世話して下さるとはいえ、基本的には頼れるのはこの一行メンバーだけなのだから、チームワークを大切に、福田団長からの言葉もあった。不思議と不安は無く、未知の世界への好奇心いっぱい、出発の日を迎えたのである。

成田で「現地でお世話して下さる日本人の方々、日本の新鮮な情報に飢えている。お土産として最新の週刊誌を買って下さい。但しイスラム国なのでヌードはダメです。」そう言われた私たちは、我々の日常感覚でこれは大丈夫と思える雑誌、週刊朝日、新潮、文春、ポスト等を購入した。

クウェート空港に降り立つと、周囲はほぼ全員が白いグトラとかケフィアとかいうアラブの伝統的な服装の人ばかり。我々のような普通の西洋風の服装をしているのは基本的に外国人だけで、入管の職員もバスの運転手もひとり残らず同じ装束。もうこの時点で思いっきりアラブである。しかし、さらにその実感を深める事件が起きた。成田で買って来た雑誌の何冊かがクウェートの税関で没収されてしまったのである！私たちの荷物を逐一検査した係官は雑誌も表紙から1ページずつめくり、日本人なら家庭で見ても恥ずかしく無いようなちょっとしたグラビアページを発見するや、その雑誌丸ごと取り上げたのである。その時である、イスラムという



レセプションで。右から2番目はカタールの観光大臣
3番目が筆者。

異文化の国に来たんだなあと思感したのは。

それ以外には理不尽な因縁を付けられる事もなく無事入国でき、いよいよ中近東公演のスタートである。

公演初日は、クウェートの大臣を始め政財界（という言い方をするのかどうか判らないが）の方など、今風の言い方だと多くのセレブが観客として来場し、華やかに幕を開けた。

クウェートはご承知の通り産油国である。豊かな国であるとは知っていたが、行ってみたらその豊かさは想像を超えていた。

まず、高熱水費は全部ただである。電話も無料、国民は医療、教育もすべて無料だと聞いた。大きなショッピングセンターには、いわゆる有名ブランドの店が並んでいるし、女性たちは、身に付けているアラブの伝統的装束、黒いブルカの中に、シャネルやディオールなどパリのオートクチュールを着ているという。道路沿いにはベンツやキャデラックなど高級車のディーラーが並び、ゴールドスークという金専門の市場には、純金製品を扱う店がひしめき合っている。ゴルフ場もあった。これは芝で無く砂を固めて作ってあった所がさすが砂漠の国であったが。

金銭的に豊かであることが文化的にも豊かであるとは限らないが、見た事も無い他国の文化を受け入れるには、それなりのゆとりが必要だという事なのかも知れない。当日の観客は始めて聞く太鼓の音には手拍子や足踏みで同調し、静かな場面では舞台に集中し、非常に楽しんでくださったようだ。さらに、翌日の新聞や、公演後にお会いした方たちの反応からも、楽しんだだけでは無く、今回の演目を通して、日本文化に対する理解と、親しみを持たれたことが感じ取れた。

こうして始まった公演旅行は、各訪問地ごとに様々なエピソードを生み出しつつ続いていくのだが、その中には「アルアインの40人の盗賊」「カタール、メイクアップアーティストの乱入」などタイトル付きで記憶にきざまれているものもいくつかある。内容はご想像にお任せした方が無難だと思うので詳しくは述べないが、一見バラバラに見えるエピソードではあっても、すべてがイスラム文化の上に立脚しているものである事は間違い無い。

私たちは日本文化の発信者として出かけていったわけだが、同時に、いや、むしろ異文化と遭遇することこそが、この旅の目的であったかのような気さえするのである。



綾子舞（公演バンフレット）



備中神楽「大蛇退治」

林 千枝氏 略歴

- ・3才で日本舞踊林流二世元林一枝に入門、6才で名取・三代目林千代丸、17才で師範名取・林千枝となる。
- ・東京藝術大学音楽学部邦楽科三味線専攻卒。
- ・2004年特定非営利活動法人 和のメソッドを設立代表を勤める。

主な受賞

- ・社団法人日本舞踊協会新人公演大会賞 77,78,79年
- ・芸術選奨文部大臣新人賞 83年度
- ・文化庁芸術祭賞 87年「オルフェ」 他

中国民族舞蹈と稲作文化（9）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席

劉 金吾

三 稲作文化の中の民俗舞蹈

6. ハニ族のミャオアイナとザルト

「ミャオアイナ」は「田植えの後の休日」という意味である。この日は緑春県のハニ族の支系ハジャ人が田植えを終えた後に祝う祭日で、一般に旧暦の5月にあたる。

祭りの当日には全村で一頭の豚と一頭の牛を殺し、村の一軒一軒にその一部が分けられる。ミャオアイナ祭が終わると牛の角でつくった笛が吹かれる。これは田を耕した牛への休息の命令を意味する。伝説によると、むかし、ミャオアイナ祭が終わった時、牧童が家から2頭の牛を声をかけながら山上に追い上げようとした。しかし田の耕作に慣れた牛は言うことを聞かず、途中から田に向かって駆け戻ってしまった。牧童はしかたなしに角笛を吹き、牛にこう話しかけた。

「かわいい牛よ、今まで大変だったよね。もう田植えも終わったし、ゆっくりお休みよ」牛はなんと牧童の言葉を理解し、喜んで山上へ駆け上がっていった。祭日の早朝、一椀の茶と一椀の酒を刈り取った青草の上にそそぎ、その後で一切れの肉を青草に包み牛に食べさせる。その時に田植えの間使用したマグワやスキをきれいに洗って決まった場所に置く。祭日の夜にはかがり火を焚き、そのかがり火を囲んで村中の人々が歌ったり踊ったりして深夜まで過ごす。

この田植えの後の休日は、村人たちだけではなく、牛の休日でもあり、それどころかスキやクワなどの農機具の休日でもあった。そして同時に人々に忠実に仕え、田植えの耕作に貢献した牛たちへの慰労を意味する日でもあった。

先人たちがこのように休日を過ごしたことは確かにとても興味を引き起こす。科学的な疲労回復の調節方法には人体に対して物質的なものだけではなく精神的なものも求められる。緊張が続く春の耕作や田植えの後、人体は物質的な補充が必要だけでなく、精神的にも楽しみやリラックスが必要とされる。この事は牛に対しても当てはまり、休息だけでなく、青草や酒肉も必要となる。同時にそれはハニ族の温厚と純朴—牛の田植えの貢献に対するいたわりを忘れず、そのことが最終的に稲作生産の発展を促進する一を反映したものである。これは文化であり、稲作文化の重要な内容を担う一部分を構成している。

「ザルト」は新年の意味で、ハニ族の最大で最も厳かな祭日である。ハニ人は毎年年初冬の旧暦十月を歳の初めとしていて、そのためこの祭日は「十月年」とも呼ばれる。但しある地方では漢族と同時に過ごし、漢族が春節を祝う時にこの地方のハニ族はザルト節としてこの日を祝う。ザルトとはもち米をこねて団子をつくることを意味する。従って餅をついたり、甘くておいしいメングオ酒を醸造したりすることがザルトの大きな特長のひとつとなっている。10月は収穫の季節であり、1年間の苦労や各種の農事の活動が基本的に終わり、穀物や果物が倉に積まれて、太った豚やニワトリが家畜小屋に入れられる。そのためどの家でも餅をつき、香酒を造り、豚や羊を食べ、歌い踊って積極的にこの祭日を楽しむ。ハニの民歌に次のような歌がある。

十月のコウリャンは火のように燃えるよ、
米やコウリャンで新しい酒を造るよ
ハニ人が十月年を祝うのだよ
シャー———シャー———

ザルトのもうひとつの盛大な活動は「街心宴」である。太陽が西に傾くころ、活発で軽快なドラの音が響く中で各家の戸主がヤマドリ、コイ、タケノコ、蜂の子などのさまざまな美味の食物やコウリャン酒をつくり、「街心宴」の場に運び、すでに用意されているテーブルの上に順番に並べる。大きな村の「街心宴」は110メートルもの長さになる。村人たちが選んだザルトの主宰者が先ず上座に着き、各家の戸主が周囲の宴席にすわる。主宰者は乾杯をして祝辞を述べ、全村の五穀豊穡、人畜の健康、村の発展などを祈念する。村人たちはそのとき厳かで豪快な「シャー—ショー—ロー」という喚声をあげる。「スオ！スオ！スオ！」（香酒を飲んで）と祝酒のかけ声の中、主催者が香酒を三杯飲み、それから全村人の酒宴が始まる。続いて年長者が手に太鼓のバチを持ち、牛皮の太鼓をたたき始める。ドラも同時に伴奏をする。主宰者は宴席の近くの地面に立ち、手にはシュロでつくった扇（棕扇）を持ち、（ある地区では紙製の扇、また他の地区では手に何も持たない場合もある）「トゥオニニ」（腰をひねって舞う踊り）を踊る。他の人々は「シャー—ショー—ロー」と掛け声をかけて踊り手を助ける。踊り手が舞いながら宴席を一周すると、他の人々は主宰者（即ち踊り手）席からの席順に従って、近い者が先に、遠い者は後で、対になって席を立ち踊り始める。互いにおどけて掛け合いをしながら気分が乗ってきて、熱をおびてくる。踊りが山場にさしかかると踊り手たちは十八番を見せるようになる。跪いて口に盃をくわえる者、また兩人がうずくまり、それぞれ相手の大腿の上に体を横たえる「仙人架橋」を演じる者もいる。口で小さなテーブルを持ち上げる者もいる。股を開いて立ち、体を前に曲げて、地上にある満杯の酒碗を口にくわえて持ち上げ、飲み干す者もある。このときにまたあの「シャー—ショー—ロー」という歓声が沸き起こり、酒も一緒に飲まれる。この祭りは村人たちの収穫後の喜びを示し、また村の振興と発展、団結と幸福を示したものである。



ハニ族の棕扇舞

注 趙官録《彩色的節日歡樂的歌—哈尼族節日采風》

〔《山茶》1994年第3期、総第82期掲載〕

翻訳： 黛民族舞踊文化財団 藤原明人

参考文献

諏訪春雄『東アジアの神と祭り』雄山閣出版、1998年

（曾紅「ハニ族の年中行事」）

欠端實『聖樹と稲魂—ハニの文化と日本の文化—』近代文芸社、1996年

萩原秀三郎『神樹—東アジアの柱立て』株式会社小学館、2001年



五節舞 人形（２ページ 舞と踊り参照）

平成１９年度黛民族舞踊文化財団活動予定

平成 19 年 5 月 14 日（金）黛民族舞踊文化財団総会

7 月 5 日（木）～ 7 月 16 日（月）中国雲南省怒江州族歌舞団訪日

韓国尹徳卿舞踊団来日

黛民族舞踊団

平成 20 年 3 月 1 日（土）・2 日（日）世界舞踊祭（赤坂区民センター）公演に黛民族舞踊団参加

研究報告誌出版予定

舞踊文化 E. T. C. No. 16 発行

民族舞踊文化 No. 19 発行

舞踊文化 E. T. C. は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をお待ちします

舞踊文化 E. T. C. No. 16

発行人 犬丸 直

平成 19 年 5 月 17 日発行

港区赤坂 3-10-3

編集人 大野 晃

財団法人 黛民族舞踊文化財団

電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639